
消せない記憶を紡ぐ恋。

岩淵潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消せない記憶を紡ぐ恋。

【Nコード】

N6972Z

【作者名】

岩淵潤

【あらすじ】

大学2年の交通事故をキツカケに、佐伯伸は恋人だった千葉実月に自分の事を忘れられてしまった。

実月に自分の事を思い出して欲しい。

そう願いながら、友達として7年が過ぎてしまった。

シャボン玉に映した記憶

近所の公園でまだ小さな子供が母親と仲良くしゃぼん玉を膨らましている姿が、洗濯物を干している最中に垣間見えた。まだ少しあどけないその子は、膨らんで宙に浮き漂うそれを必死に掴もうとしていた。

ぱちん、と音を立てるようにして小さな手の中に消えたシャボン玉を見て、今なお残る、痾にも似た傷に痛く響いた。

胸に波のように押し上げてくる気持ちを抑えるかのように、わざと勢い良く洗濯物をぱん、とシワを伸ばすと、母親の方が俺に気づいてこちらを見た。

「おはようございます。今日はお仕事はお休み？」

「はい。一週間ちよつと、かなり早めの夏休みです。」

「そう、もう少しで忙しくなるものね。」

大学を出てからかれこれ5年。ボロくも無く、狭くもない。だからと言って、家賃が高いわけでもない。まあまあと言える物件に出会い、愛着もあつてか、仕事場である旅行代理店の事務所から自転車通勤でしか手段のないこの土地を離れられないでいた。

「来月はニューヨークなんで、また何か頼み事あつたら遠慮なく言ってください。」

こういう仕事柄、国内だけじゃなく国外にも飛ばされるようになり、現地のガイドと一緒に旅行プランを練り上げる。

とにかく小さい頃から外国という、日本とは違う街並みにただ純粹に憧れを抱いていた。

大都市であっても、日本のそれとはまた異なつて自然と共にある都市や、国によつて異なるそのスケールの大きさに魅力を感じていた。

『いいなあ・・・私も連れて行って。』

振り返つて洗濯かごをそのままソファに放り投げて、もう1度ベランダから顔を出すと、さっきの女の子が1人でまだシャボン玉を膨らませていた。

2階に位置する俺の部屋までふわふわと飛んでくるそれが、もっと高いところへと、春と夏の間色の風に乗せられて舞い上がるうとしていた。

『ノブが連れて行ってくれるんでしょ？・・・ふふ、どこにでも行けるね。』

ふわふわと、俺の知らない空の向こうではちんと消えていくであろうそのシャボン玉を、俺は掴み取ることも優しく包みこむことも出来ないまま、恐ろしく天気の良い空を眺めていた。

幻想にも聞こえた、優しくそして脆いその声に俺は恋していた。

なあ、みつき。

ぱちんと割るように消えてしまった記憶は、もう2度と戻らないの
だろうか？

追憶の彼方にいくつも思い出は蘇るけど、みつきには見えてる？

きやつきやつとしゃぼん玉をみてはしゃぐ女の子が、小さい頃のみ
つきと重なって見えた。

『海の見える街に行きたい。』

みつきが俺を忘れてからちょうど7年目の夏が来る。

午後の昼さがり

冷蔵庫からペットボトルを取り出して常温に戻していく。

ずっと1人だとマイルールばかり増えてきて、なんとなくそれが居心地はいいにしても、誰かと新しい生活をするなんて想像がいつの間にか出来なくなっていた。

窓を全開にして、外からの空気を取り込む。太陽の光と共に、干したばかりの洗濯物が外の景色と重なっていた。

平穏な平日の午後に流れるワイドショーは、生活臭の溢れる部屋に雑音として入り込んで、逆に違和感はない。へえ、こんな小さい子もテレビなんか出ちゃうの。苦労してんな。真つ黒な大人たちに囲まれて、いつかはませていくんだろっな……。

ほんとに、他人事のような平日の午後だ。

それからしばらく面白おかしく喋るワイドショーに見入って、そのあとやっと常温水に手を伸ばした。

ペットボトルにまとわりついてた水滴が手のひらに広がって、Tシャツの裾でそれを拭くと、キッチンサイドボードに置いてあった携帯が点滅していることに気が付いた。

やべ。すっかり忘れてた。

今はスマートフォンだとかiPhoneだとか、便利なものほどよく売れているみたいだけど。そして実はこの情報もワイドショーの受け売りだったりする。

かなり使い古した、塗装が剥げまくりのこの携帯も案外悪くはない。カチコチとボタンを押すと、1時間前くらいに着信があったことが分かった。

・・・1時間前か。あつちはちょうど昼休憩終わったところだったのだろう。

今かけたとして、出るか？まあ、出なきゃ出ないで、留守電残すか。かなり安易な感じで、発信ボタンに親指を合わせた。

「・・・はい。」

「ごめん、さっき・・・気づかなくて。」

「またマナーにしてたでしょ？」

「や、今回はガチで気付かなかった。それより、今かけても良かった？」

「うん、ちょうど授業入ってなかったから。」

あっけなくでた電話にいかにも話を聞く気満々ですといった感じに俺は、

また手が濡れないようにペットボトルのキャップ部分を掴んでソファのあるところまで移動する。

沈むようにソファに身をあずけると、ふう、といったため息が電話越しに聞こえて俺は目を閉じた。

「どうした？」

「・・・うん。」

たぶんきつと、

コイツのこういつ時って、いつも緊張している証拠だ。

あいつなりに、ゆっくりと言葉を選んでいる。

それを理由に、言葉を時間をかけて選んでいる時間の間は、とてつもなく美しいと感じてしまう。

機械の向こう側から聞こえる、規則正しい呼吸音やため息が、綺麗で優しい。

目を閉じれば、なんとなく容易にあいつの姿が見えるような気がして、俺もその呼吸音に合わせてみる。

「あのね」

「ん……？」

「ノブ君に、話があるんだけど。」

「……話？」

「そう。話……今日、夕方会えますか？」

話？

「……はい、はいけど。」

「ごめんね、突然。」

「大丈夫。迎えいくよ。何時終わり？」

機械越しにどこか安堵したような空気が伝わってきて、心の奥にジーンと来るものがあった。

コイツの、独特な空気に安心感を覚えて、電話で目を閉じる習慣が身についた。

それは他人に言わせてみれば、一方通行の片想いに似ていた。

あいつをもっと近くで感じていたくて、

あいつが作り出していた空気とか雰囲気や電波を介して懸命にたくり寄せる。

掴み取るような感覚は決まっていなくても、それでもたくり寄せたあとの暖かさだけでも俺の心を十分に満たしてくれた。

「じゃあ、18時に校門前でお願いします。」

「了解。・・・あっ、みつき。」

「なに？」

「・・・や、何でもない。・・・生徒に舐められんなよ？」

「バカにしないの。」

ふふっ、と笑いながら切れてしまった携帯を、大きくため息をつきながら、近くにあったクッションに投げつけた。

いつの間にか、

ウッド調のローテーブルに置いていたペットボトルの水滴が水たまりを作っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6972z/>

消せない記憶を紡ぐ恋。

2011年12月25日01時46分発行